

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25463552

研究課題名（和文）在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標の開発

研究課題名（英文）Development of an index for self-evaluation of a team approach to improving quality of life in older adult receiving home-based care

研究代表者

松井 妙子 (matsui, taeko)

香川大学・医学部・教授

研究者番号：50290359

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：目的は、訪問看護事業所・訪問介護事業所・居宅介護支援事業所のトランスディシプリナリーチームアプローチ（以下、TA）の実践状況を自己評価する指標を開発することである。先行研究を参考に45項目のTA指標を作成し、その妥当性・信頼性は一定の基準を満たしていた。この指標を尺度として、関連要因を探索的に分析した結果、職業的アイデンティティの「職業上の役割に関する自分らしさの獲得感」、職場環境の「利用者本人や家族との肯定的関係」、「三職種でのチーム活動経験の有無」、「チームメンバーと活動して支援がうまくいった経験の有無」がTAに関連を強く示した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to develop an index for self-evaluation of the progress of a trans-disciplinary team approach (TA) at home visit nursing agencies (home visit nurses), home visit care agencies (home care service coordinators), and home long-term care support centers (care manager). We created a TA index of 45 items based on previous studies and ensured that it met certain standards for validity and reliability. Exploratory analysis of relevant factors revealed a strong relationship between TA and “sense of achieving one’s own style in one’s professional role” as an aspect of professional identity, “positive interactions with care recipients and their family members” as an aspect of work environment, and “experience or lack thereof in activities as a team of three disciplines” and “experience or lack thereof in successfully providing support with other team members” as aspects of individual characteristics.

研究分野：看護学（在宅看護学）

キーワード：チームアプローチ トランスディシプリナリーチーム 訪問看護 訪問介護 居宅介護支援 職業的アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

多職種協働チームには、3つのモデルがある¹⁾と言われている。国内外において、Interdisciplinary team に関する研究は、行われているが、事業所(職種)間の相互作用が大きく、役割解放を伴う Transdisciplinary team に関する研究はほとんど行われていない。

訪問看護事業所・訪問介護事業所・居宅介護支援事業所従事者によるチームアプローチは、事業所従事者間の相互作用が大きく、終末期支援では訪看がCMの役割を代替するなど、役割の解放があり、階層性がない活動である。このような三事業所従事者(三職種)を対象とした研究は少なく、チームとしてより良いサービスを提供していくための方策を探究する研究も行われていない。

2. 研究の目的

研究の目的は、訪問看護事業所・訪問介護事業所・居宅介護支援事業所従事者のチームアプローチ(以下、TA)の実践状況を自己評価する指標を開発することである。

3. 研究の方法

以下のように研究を進めた。

(1)本研究におけるチームアプローチの概念作成

文献検討をもとに、「Transdisciplinary Team approach」とは、「役割の拡大(extension)、役割の強化(enrichment)、役割の発展(expansion)、役割の解放(release)、役割のサポート(support)などの活動を行い、対象者のアウトカムの改善を推進するチームアプローチ」と定義した。

(2)TA指標(調査項目)の作成

Carolyn²⁾は、TAを可能にするには役割の拡大(extension)、役割の強化(enrichment)、役割の発展(expansion)、役割の解放(release)、および役割のサポート(support)という5つの前提があると述べている。そこで、先行研究³⁻⁵⁾の結果から144項目のアイテムプールを作成し、意味内容がよく似た項目、抽象度、Transdisciplinary teamの行動特性を特徴的に表す項目などをこの5つの前提に沿って、取捨選択し、最終的に45項目のTA指標を作成した。

回答選択肢は「実践できている」を5点～「実践できていない」を1点とするリッカトスケールとした。

(3)調査の実施

調査対象は、訪問看護事業所の訪問看護職(以下、訪看)・訪問介護事業所のサービス提供責任者(以下、サ責)・居宅介護支援事業所の介護支援専門員(以下、CM)とした。47都道府県から無作為抽出した24都道府県のWAMNET(平成27年2月2日時点)に登録されている各事業所800か所、計2400か所

を無作為抽出し、各事業所1名に回答を依頼する自記式質問紙による郵送調査を実施した。

調査期間は、平成27年3月20日～4月20日までの約1か月間であった。

4. 研究成果

(1)調査結果

回収数は、697票、回収率は29.0%であった。三職種以外のものが回答した4票を除き、TA指標の項目に完答した602票を分析に使用した。有効回収率は、25.1%である。

(2)基礎属性の結果

対象の事業所(職種)種別は、訪看238人(39.5%)、サ責151人(25.1%)、CM213人(35.4%)であった。性別は女性が多く83.6%であった。対象者の平均年齢は48.3(±9.2)歳、年齢構成では50代が最も多く230人(38.2%)、次に40代が196人(32.6%)であった。

雇用形態では正規職員562人(93.4%)、非正規職員23人(3.8%)、その他17人(2.8%)であり、回答者の9割以上が正規職員であった。

専門職としての平均経験年数は16.6(±8.8)年、カテゴリー別では「11年～15年」が最も多く146人(24.3%)、次に「6年～10年」が145人(24.1%)、「16年～20年」が98人(16.3%)であった。在宅・地域関連の平均経験年数は9.7(±5.8)年、カテゴリー別では「6年～10年」が最も多く199人(33.1%)、次に「5年以下」「11年～15年」が153人(25.4%)であった。15年以下が8割以上を占めており介護保険制度後に在宅ケアに携わったことが伺えた。

所有資格(重複回答)は、看護師269人(44.7%)、介護福祉士243人(40.4%)であった。また介護支援専門員資格を有する者は329人(54.7%)であった。

(3)TA指標の単純集計結果

TA指標45項目の平均値は、3.10(±.96)点から3.92(±.85)点であった。平均値が最も高かった項目は「目的や状況によって『連絡ノート』『電話』『会議』など最も望ましい連絡手段を選択する」が平均値3.92(±.85)点であり、次に「在宅高齢者の身体的、精神的、社会的な状況の変化がある場合には迅速に情報の共有を図る」が3.77(±.83)点であった。

平均値が最も低かった項目は、「在宅高齢者に対して、漏れてしまうニーズに誰が対応していくのか自らの役割を超えて利用者ニーズを中心とした分担を行う」が3.10(±.96)点であり、次に「チームメンバーに職務以外のケアを依頼するときは、できる限りの準備を整える等、職務を超えることへの抵抗を軽減する」が3.17(±.97)点であった。

連絡手段の選択など比較的単純なチームアプローチ実践の自己評価の平均値は高かった。しかし、高齢者利益のために、職種間の信頼関係に基づいた踏み込んだチームアプローチ実践の自己評価の平均値は低かった。

(4)TA 指標の信頼性の検討結果

ヒストグラムによる回答分布の形状は一峰性であった。TA 指標の 45 項目について天井効果、フロア効果を示す項目はなかった。45 項目のクローンバックは、0.98 であった。項目間相関の結果、相関係数 0.8 以上の 2 項目を除外して因子分析を行った。

(5)TA 指標の因子構造

因子負荷量 0.4 以上を採用した結果、4 項目が除外、4 因子が抽出された。第 1 因子は 22 項目で構成され「具体的な方法を活用したアプローチ」($r = .969$)、第 2 因子は 5 項目で構成され「チーム内での役割解放のためのアプローチ」($r = .862$)、第 3 因子は 7 項目で構成され「チームの発展や拡大につながるアプローチ」($r = .926$)、第 4 因子は 5 項目で構成され「チームの強化につながるアプローチ」($r = .908$)と命名した。

(6)TA 指標との関連要因

1)三職種の職業的アイデンティティの構造

分析の結果、除外項目はなく 2 因子が抽出された。第 1 因子は 8 項目(「目標・目的の実現」、「求められる能力を保持」、「職業的な生き方に対する肯定感」、「役割を自覚」、「自己判断が可能である」、「職業的な生き方を自己決定」、「職業的な生き方への努力」、「役割に関してうまくやっけていけそう」)で構成され「職業上の役割に関する自分らしさの獲得感」($r = .88$)、第 2 因子は 4 項目(「周囲ばかり気にして職業的な生き方を選択」、「自分なりの職業的な生き方に関して目標・目的がわからない」、「階級・役職に応じた目標・目的がよくわからない」、「所属している事業所の一員としてふさわしくない」)で構成され「職業上の役割に関する自分らしさの喪失感」($r = .77$)と命名した。

2)TA 指標との関連要因

三職種の基本属性との関連

t 検定および分散分析の結果、TA に関連する要因には、「性別」、「三職種でのチーム活動経験の有無」、「チームメンバーと活動して一緒に喜びを感じた経験の有無」、「チームメンバーと活動して支援がうまくいった経験の有無」、「身近な人への介護体験の有無」が示された。

仕事の環境との関連

重回帰分析の結果、TA に関連する要因には、「チームアプローチやチームワーク、連携などに関わる職場外研修受講の有無」、「利用者本人や家族との肯定的関係」、「連携時間の確保」が示された。

職業的アイデンティティとの関連

重回帰分析の結果、TA に関連する要因には、「職業上の役割に関する自分らしさの獲得感」、「職業上の役割に関する自分らしさの喪失感」が示された。

～ の分析結果から、特に TA に関連を強く示した要因は、「職業上の役割に関する自分らしさの獲得感」、「利用者本人や家族との肯定的関係」、「三職種でのチーム活動経験の有無」、「チームメンバーと活動して支援がうまくいった経験の有無」であった。

以上のことから、三事業所(三職種)の TA を促進するには、職業的アイデンティティの獲得を促進する教育および研修、利用者との良好な関係を形成する技術、良好なチーム活動の経験が重要であることが示唆された。

(7)三職種の職業的アイデンティティの分析結果

2 次解析として、三事業所間で、職業的アイデンティティ⁶⁾「職業役割に関する自分らしさの感覚の獲得感」、「職業的な自分らしさの実現感」、「職業的自己の喪失感」の比較を行い、さらに職業的アイデンティティに影響する因子を検討した。基本属性および職業的アイデンティティの質問項目に完答した 615 票(訪看 248 票、サ責 148 票、CM219 票)を分析対象とした。

三事業所間で職業的アイデンティティ合計得点の有意な差は認められなかった。下位項目の検討において、訪看では、「職業的な自分らしさの実現感」が、CM に比較して有意に高値を示した。多変量解析を用いて職業的アイデンティティに影響する因子を検討した結果、全事業所では、年齢、チーム活動の経験が有意に関連していた。事業所ごとの検討において、訪看ではチーム活動の経験、サ責では年齢とチーム活動の経験、CM では専任/兼任、年齢が影響していた。年齢が高いほど、三事業所(三職種)のチームによる活動経験があるほど、職業的アイデンティティが高かったが、事業所ごとで特徴が認められた。

チーム活動を経験することで職種としての自身の立場を意識することになり、職業的アイデンティティが向上すると思われる。今後、チーム活動を推進していくことで、在宅療養高齢者に係わるスタッフの職業的アイデンティティの向上にも役立つ可能性が示唆された。

(8)自由記述の結果

三職種に「三職種との連携やチーム活動を実践されている中で感じる課題」、「在宅療養者支援において、連携やチーム活動を実践されている中で感じる課題」について自由記述で質問した。そのうち、CM の自由記述の内容を分析した。

三職種との連携やチーム活動を実践している中で感じる課題

213 票(回収率 26.6%)の内、CM が自由記

述に回答した 79 票を分析の対象とした。分析方法は、佐藤⁷⁾の質的分析法を参考にした。1 センテンスを 1 エピソードとし、コード化した。その結果、116 のエピソードに分かれ「各専門職の知識、技術の課題(27 エピソード、以下略)」、「チーム活動の効果的活用の課題(35)」、「チーム活動に影響を及ぼす環境の問題(11)」、「基盤整備の課題(21)」、「チーム活動を阻害する職種間の上下関係の課題(22)」の 5 つのトップカテゴリーを抽出した。CM が、実践のなかで感じる課題は、「チーム活動の効果的活用の課題」であり、CM は利用者支援においてチーム活動の有効性を認識しているが、効果的活用が不十分であると認識していた。チーム活動の効果的活用には、各専門職の知識や技術が不十分であると考えていた。加えて職種間の上下関係がチーム活動を阻害していると感じていた。

在宅療養者支援において、連携やチーム活動を実践している中で感じる課題

133 のエピソードに分かれ、抽象化した結果、「利用者及び家族固有の課題(30)」、「チーム活動の実践力向上のための養成教育、現任教育の課題(29)」、「チーム活動の効果的な活用の課題(33)」、「チーム活動における専門職間の対等な関係性の確保の課題(14)」、「チーム活動を促進するための基盤整備の課題(27)」の 5 つのトップカテゴリーに分類された。

最も大きな課題と認識しているのは、CM を含めた専門職の基礎資格についての教育の充実とチーム活動に関する教育の必要性であった。チーム活動を推進するための信頼関係構築の必要性、日常的な関係性の構築のための努力、担当者会議の効果的な活用、情報共有の必要性を認識していた。

<引用文献>

- (1)菊地和則：多職種チーム 3 つのモデルチーム研究のための基本的概念整理、社会福祉学、59(2)、1999、273-290
- (2)Carolyn Reilly: Transdisciplinary Approach: An Atypical Strategy for Improving Outcomes in Rehabilitative and Long-Term Acute Care Setting, Rehabilitation Nursing, 26(6), 2001, 216-220
- (3)松井妙子、鳥海直美：介護保険制度下における訪問看護と訪問介護の連携コンピテンシー抽出の試み、新たな社会福祉学の構築、中央法規、2011、112-124
- (4)松井妙子、他：在宅高齢者終末期におけるチームケアのためのガイドライン作成に関する研究、フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成、2007、693-716
- (5)松井妙子、他：在宅高齢者ケアにおける訪問看護事業所、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所のチームアプローチに関連する要因分析、大阪ガスグループ福祉財団研究報

告書 24、2011、99-108

(6)児玉真樹子、他：企業職業者用職業的アイデンティティ尺度の作成、産業ストレス研究 12、2005、145-155

(7)佐藤郁哉：新曜社、質的データ分析法、2008

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1)内海恵子、松井妙子、沖亞沙美、畑吉節未、訪問看護師の職業的アイデンティティ尺度開発の試みと信頼性・妥当性の検討、香川大学看護学雑誌、査読有、21 巻、2017、41-54

(2)綾部貴子、松井妙子、原田由美子、居宅介護支援事業所の介護支援専門員による訪問看護や訪問介護とのチーム活動の関連要因-共分散構造分析による検証-、介護福祉研究、査読有、24 巻、2017、1-5

(3)内海恵子、松井妙子、沖亞沙美、畑吉節未、グループインタビュー法を用いた訪問看護師の職業的アイデンティティの構成要素抽出の試み、香川大学看護学雑誌、査読有、20 巻、2016、39-49

〔学会発表〕(計 14 件)

(1)松井妙子、綾部貴子、宮武伸行、沖亞沙美、原田由美子、冨田川智志、畑吉節未、訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所従事者の職業的アイデンティティの構造、第 22 回日本在宅ケア学会学術集会、2017 年 7 月 15 日~16 日：北星学園大学(北海道・札幌市)

(2)綾部貴子、松井妙子、宮武伸行、原田由美子、畑吉節未、居宅介護支援・訪問看護・訪問介護のトランスディシプリナリーアプローチに関する研究 職業的アイデンティティとの関連、第 22 回日本在宅ケア学会学術集会、2017 年 07 月 15 日~16 日：北星学園大学(北海道・札幌)

(3)綾部貴子、原田由美子、畑吉節未、松井妙子、介護支援専門員によるトランスディシプリナリーアプローチ展開上の仕事環境の現状分析、日本ケアマネジメント学会第 16 回研究大会、2017 年 6 月 14 日~16 日：名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)

(4)綾部貴子、原田由美子、松井妙子、介護支援専門員による医療や介護とのトランスディシプリナリーアプローチの関連要因、第 59 回日本老年社会科学大会、2017 年 6 月 14 日~16 日：名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)

(5)宮武伸行、松井妙子、綾部貴子、訪問看護・訪問介護・居宅介護支援事業所間での職業的アイデンティティの比較、第 75 回日本公衆衛生学会総会、2016 年 10 月 26 日~28 日：グランフロント大阪(大阪府・大阪市)

(6)綾部貴子、宮武伸行、松井妙子、訪問看

護・訪問介護・居宅介護支援によるトランス
ディシプリナリーアプローチ研究、第 75 回
日本公衆衛生学会総会、2016 年 10 月 26 日～
28 日：グランフロント大阪(大阪府・大阪市)
(7)綾部貴子、原田由美子、松井妙子、在宅
療養高齢者に対する居宅介護支援・訪問看
護・訪問介護のトランスディシプリナリーア
プローチ実践に関する研究(2)仕事の環境と
の関連、日本社会福祉学会第 64 回秋季大会、
2016 年 9 月 10 日～11 日：佛教大学柴野キャン
パス(京都府・京都市)
(8)綾部貴子、原田由美子、畑吉節未、宮武
伸行、富田川智志、松井妙子、居宅介護支援・
訪問看護・訪問介護のトランスディシプリナ
リーアプローチ実践の構成要素、第 21 回日
本在宅ケア学会学術集会、2016 年 7 月 16 日
～17 日：東京ビッグサイト TFT ビル(東京都・
江東区)
(9)Takako Ayabe, Taeko Matsui, Status of
Medical and Care Team approach in
long-term care insurance system in Japan
Part 1 : The structure of the Trans
disciplinary approaches by the home care
service coordinators, June 21～24, 2016:
Chiang Mai(Thailand)
(10)綾部貴子、原田由美子、畑吉節未、松井
妙子、居宅介護支援事業所の介護支援専門員
によるサービス提供責任者や訪問看護職と
のトランスディシプリナリーアプローチの
実践の現状、日本ケアマネジメント学会第 15
回研究大会、2016 年 6 月 18 日～19 日：北九
州国際会議場(福岡県・北九州市)
(11)綾部貴子、原田由美子、畑吉節未、宮武
伸行、富田川智志、松井妙子、訪問看護・訪
問介護・居宅介護支援によるトランスディシ
プリナリーアプローチ実践の現状、2016 年度
日本老年社会科学会第 58 回大会、2016 年 6
月 11 日～12 日：松山大学(愛媛県・松山市)
(12)訪問看護師のチームアプローチ経験と
所属組織のスーパービジョンの機会および
介護体験との関連、沖亞沙美、松井妙子、畑
吉節未、第 35 回日本看護科学学会学術集会、
2015 年 12 月 5 日～6 日：広島国際会議場(広
島県・広島市)
(13)内海恵子、松井妙子、畑吉節未、訪問看
護師の職業的アイデンティティの尺度開発
の試みと信頼性・妥当性の検討、第 35 回日
本看護科学学会学術集会、2015 年 12 月 5 日
～6 日、JMS アステールプラザ(広島県・広
島市)
(14)綾部貴子、原田由美子、訪問介護事業所
のサービス提供責任者による介護支援専門
員や訪問看護職とのトランスディシプリナ
リ - アプローチ実践の現状、第 23 回日本介
護福祉学会大会、2015 年 9 月 26～27 日：金
沢市文化ホール(石川県・金沢市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

松井 妙子(MATSUI, Taeko)

香川大学・医学部・教授
研究者番号：50290359

(2)研究分担者

綾部 貴子(AYABE, Takako)
梅花女子大学・看護保健学部・准教授
研究者番号：10530305

畑 吉節未(HATA, Kiyomi)
神戸常盤大学・保健科学部・教授
研究者番号：10530305

宮武 伸行(MIYATAKE, Nobuyuki)
香川大学・医学部・准教授
研究者番号：30510705

(3)連携研究者

原田 由美子(HARADA, Yumiko)
元京都女子大学・家政学部・准教授
研究者番号：60342292

(4)研究協力者

富田川 智志(TOMITAGAWA, Satoshi)
京都女子大学・家政学部・助教
研究者番号：90441881